街歩きとタバコと猫と

齋藤　純

私は週末になると、ウォーキングシューズに履き替え、今まで訪れたことのない街を散策することを趣味にしている。持っていくものは地図と財布とデジカメだけ。音楽機器などは持ち歩かない。散策好きにとって街が奏でる音楽も楽しみの一つだからである。見知らぬ駅に降りるとまず習慣的に本屋と喫茶店を探してしまう。本屋で書籍を物色して、喫茶店で珈琲をすすりながら疲れを取るためだ。そしてやはり交通量の多い大通りより路地裏の風景に心が惹かれる。路地裏で昼寝をしている猫をデジカメに納めながらしばらくふらついてはふと見つけた喫茶店に入り、地図に気になったスポットを描き込んでいく。珈琲を一杯すすったら、再び街探索を開始するのである。街によってそれが発する景色も音も匂いも異なる。残念ながら首都圏では近年どの街も似たような景色になってきてしまっているが、そんな中でもその街独特の雰囲気を見つけて感じることが何よりも楽しい。

昨年の秋にいくつかの国々を回り、時間を見つけては異国の街を散策できたことは海外経験の乏しい私には至福な一時であった。晩秋のモスクワの街は木々が色づき肌寒いが、長時間歩いて身体も温まるため散策するには適している。モスクワで第一に感じたのは、その躍動感である。ロシア政府は二〇〇六年の実質GDP成長率の予測を六・六%に上方修正した。潤沢なオイルマネーにより高成長を続けるマクロ経済を反映して、モスクワの街の人々は足早に歩を進め、交通渋滞は日常茶飯事、街のあちこちで建設工事が行なわれている。そして歩道にはいたるところにタバコの吸殻が散乱している。日本では全国的な禁煙化の流れによって、道端の吸殻が少なくなった印象があるが、モスクワのあちこちで吸殻の山を見かけることができた。英米の喫煙率が男女ともに二〇%台であるのに対して、ロシアの喫煙率は男性が六割、女性が一割である（ちなみに日本の場合は男性五割、女性一割）。車の排気ガスとタバコの煙でモスクワの街の匂いは、私が子供の頃住んでいた工業都市の繁華街に近い。

カイロの街は地区によって変化に富んでいる。日本人が数多く住んでいるゲジラ地区の街並みは東京都心部のそれとあまり変わりがない。二四時間営業のスーパーマーケットにインターネットカフェ、お洒落な喫茶店。街歩きをする環境は整っている。被写体となる可愛い猫も多い。街区も整然と整理されているため、街歩きの難易度は高くはない。一方で、カイロの下町にあたるハン・ハーリ地区では新しい刺激を与えてもらった。入り組んだ土産物街になっているこの地区はとにかく歩きにくい。狭い路地に溢れんばかりの人々が行き交っている。携行してきた地図が全く役に立たない。探していた本屋の場所が分からない。そもそも自分が今どこにいるのか分からないのだ。街のトルコ・コーヒー店で心を落ち着けることにした。方向感覚には絶対の自信を持っていたが、そんなちっぽけな自信は打ち砕かれてしまった。迷いに迷って、突如舗装されていない道に出る。スノーボード競技のハーフパイプのように道が削られていて、しかもいたるところに穴が開いている。さらにその道をごみの山が遮っている。そのごみの山を漁る痩せ細った猫が印象的であった。最近の日本ではなかなかお目にかかれない光景だ。しかし、歴史を感じさせる建物や商売人の活気ある呼び声はこの街の風景に似合っている。またお気に入りの散策路が出来てしまった。

日本に帰ってきてからも、その街独自の雰囲気を探すために街歩きをしているが、最近増えてしまった体重を戻すために歩く距離を増やしていることは内緒である。

（さいとう　じゅん／アジア経済研究所
地域研究センター）